北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

初期テオドール・オーピッツ研究の基礎構築：ヘーゲル左派研究史におけるテオドール・オーピッツ初期著作目録（1842-1850年）の意義

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2013-04-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 田村, 伊知朗
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006117

北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）第63巻　第２号　　平成25年２月
Journal of Hokkaido University of Education (Humanities and Social Sciences) Vol. 63, No.2　　February, 2013

初期テオドール・オーピッツ研究の基礎構築
―― ヘーゲル左派研究史におけるテオドール・オーピッツ初期著作目録（1842-1850年）の意義

田　村　伊知朗

北海道教育大学教育学部函館校政治学研究室

Einleitung zur Bibliographie des jungen Theodor Opitz (1842-1850) im Zusammenhang mit der Forschungsgeschichte der Hegelschen Linke

TAMURA Ichiro

Department of Political Science, Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

概　要

ブルーノ・バウアーは1843/44年において自己意識の哲学から純粋批判の哲学への転換をおこなった。この思想的転換の意義は，19世紀中葉におけるヘーゲル左派の内部論争を超えて近代思想史総体と関連する。この純粋批判の哲学が，若きテオドール・オーピッツの思想と交錯する。彼は，今後の研究の進展が期待されている周辺ヘーゲル左派に属している。ヘーゲル左派の思想的意義づけは，近代の多様性という観点から再検討されねばならない。本稿は，オーピッツ初期著作目録の意義をヘーゲル左派の著作目録に関する研究史において位置づける。

１．はじめに

ブルーノ・バウアーは1843/44年において自己意識の哲学から純粋批判の哲学への転換をおこなった。この思想的転換の意義は，19世紀中葉におけるヘーゲル左派の内部論争を超えて近代思想史総体と関連する。この純粋批判の哲学が，若きテオドール・オーピッツ（1820-1896年）の思想と交錯する。

オーピッツの名前は本邦の読書界にほとんど知られていないので，ここでその略歴に簡単にふれてみよう。オーピッツは1820年にシュレージエンで生まれた。彼は，ドイツ三月前期においてヘーゲル左派として，三月革命期には急進主義的ジャーナリストとしてドイツ精神史にその名を刻む。彼は三月革命敗北以後，詩人として活動したと同時に，プーシキン等の外国語の詩をドイツ語に翻訳した。

彼のヘーゲル左派としての思想的営為には，ブルーノ・バウアーの純粋批判が密接に関連している。もちろん，彼の思想はバウアーの哲学に全面的に依拠していたのではない。しかし，ヘーゲル左派そしてブルー

ノ・バウアーの思想を受容したことを看過すれば，彼の思想は解明できなかったであろう。また，両者は三月前期だけではなく，19世紀後半において初期ニーチェをめぐってほぼ同一の思想視角を取る。バウアーはその死の直前までオーピッツと手紙を交換して，若き日の哲学の意義を再確認しようとする。

このようなオーピッツの思想を研究する根拠はどこにあるのであろうか。それはこれまでのヘーゲル左派に関する研究史を総覧することにある。この作業の中心は，中心ヘーゲル左派だけではなく，周辺ヘーゲル左派の研究の意義を再検討することにある。

まず，周辺ヘーゲル左派に関する研究根拠は，後期近代という時代精神にある。それは，マルクス，エンゲルスという社会主義の創立者とみなされた思想家がその権威を失墜してきたことと関連している。ヘーゲル左派研究は，彼らの思想的環境を整備することによって始められた。しかし，両者の思想が失墜したことによって，ヘーゲル左派の研究意義が相対的に浮上してきた。「青年ヘーゲル派という，忘れさられてきた社会理論的な代替選択肢は，マルクス主義者によって『観念論的』あるいは『小市民的』イデオロギーとして克服されたものとみなされてきた。しかし，これがとりわけ関心を引く」。[1] 巨大な思想体系によって「観念論的」あるいは「小市民的」という否定的評価を与えられた思想家群が，巨大な思想的空白において位置づけられる。マルクス，エンゲルスの思想的前提が崩壊したことによって，彼らと異なる方向での社会認識が脚光を浴びる。

また，与件としてのマルクス，エンゲルスの思想的前提の崩壊は，ヘーゲル左派という学派全体の研究方針に影響を与える。つまり，これまでのヘーゲル左派研究は，マルクス，エンゲルスの思想的発展の環境を精微化することにその主眼があった。この研究的偏向を矯正するためには，彼らの思想的発展においてほとんど関係しなかったヘーゲル左派が研究対象にならねばならない。フォイエルバッハ，ルーゲ，ヘス等の中心ヘーゲル左派だけではなく，むしろマルクス，エンゲルスとはほとんど関係しなかった周辺ヘーゲル左派が研究対象にならねばならない。青年ヘーゲル派の境界部分が研究されて初めて，その学派の歴史的意義と現代的意義が確定される。境界づけが明確でないかぎり，事柄の本性を概念的に把握することはできない。

周辺ヘーゲル左派，とりわけマルクス，エンゲルスとほとんど関係を持たなかったヘーゲル左派，カール・ナウヴェルク，カール・シュミット，アドルフ・ルーテンベルク，Ｗ・レッサー，ヘルマン・イエリネック等に関する研究が要請されている。[2] ヘーゲル左派は社会主義の思想的創立者に限定されてはならない。レーヴィットによれば，ヘーゲル左派は「哲学的理論を，急進主義的社会主義の世界史的運動に奉仕させる」。[3] この著名なヘーゲル左派研究者によるヘーゲル左派という思想集団に関する性格づけが，必ずしも妥当しえなくなっている。むしろ，ヘーゲル左派の思想的一体性は，「ブルジョワ民主主義的要請に対して理論的基礎を与えることにある」。[4] まさに，近代民主主義の多様性という観点からこの思想が再検討されねばならない。超近代ではなく，近代それ自体に関する時代認識の妥当性が問われている。その結節点に周辺ヘーゲル左派がある。

1　W. Eßbach: Max Stirner-Geburtshelfer und böse Fee an der Wiege des Marxismus. In: Hrsg. v. H. Bluhm: Die deutsche Ideologie. Berlin 2010, S. 167.

2　近年，この状況の一部は改善されてきた。たとえば，カール・ナウヴェルクとカール・シュミット研究に関しては，田村伊知朗『近代の揚棄と社会国家———初期カール・シュミットと初期カール・ナウヴェルクの政治思想』萌文社，2005年，参照。

3　K. Löwith: Die Hegelsche Linke. Stuttgart/Bad Cannstatt 1962, S. 7.

4　H. u. I. Pepperle: Die Hegelsche Linke. Dokumente zu Philosophie und Politik im deutschen Vormärz. Leipzig 1985, S. 18.

2．三月前期における初期オーピッツに関する研究史

このような周辺ヘーゲル左派に属している思想家が，本稿の対象であるテオドール・オーピッツである。オーピッツに対して従来の研究者はどのように取り扱ってきたのであろうか。少なくとも，1960年以前においてマルクス，エンゲルスの研究家はその周辺資料に対する洞察を欠いており，彼の思想をほとんど顧慮していない。

この研究視角が転換した契機は，1960年代及び1970年代における旧東ドイツの実証的研究であった。マルクス，エンゲルスの直接的な論争相手，フォイエルバッハ，ブルーノ・バウアー，ヘスだけではなく，それとは直接的関係を持たない周辺ヘーゲル左派に関する研究が進展した。その嚆矢となったのは，A・コルニュの業績である。この研究業績は，その完成度において他の追随を許していない。[5] この業績は，「初期マルクス，初期エンゲルスの思想形成過程の研究を主題としながらも，ヘーゲル左派研究史において，史料操作の体系性という観点から画期的と言える」。[6] 本書は，これまでのマルクス，エンゲルス研究における研究方法のパラダイム転換とみなしうる。それは，彼らと同時代のアルヒーフ史料，新聞，雑誌等を渉猟することによって，結果的にヘーゲル左派研究書になっている。これまで研究史上においてほとんど看過され，名前さえ知れられてなかった周辺ヘーゲル左派が知られるようになった。このようなヘーゲル左派研究史において画期的とみなされる本書ですら，オーピッツの業績に関しては，本文ではなく，その注釈においてその著作と『トリーア新聞』におけるいくつかの記事に言及しているにすぎない。[7]

コルニュはオーピッツを周辺ヘーゲル左派の一人として認識しながら，その思想史的意義を看過している。それに対して，コルニュに続く世代，とりわけW・メンケはマルクス，エンゲルス研究を究極的に高めることによってそれを実質的にヘーゲル左派研究へと転換した。[8] 彼は未完の労作，『マルクス・クロニック』において，マルクスとその周辺の思想家の関係を年代ごとではなく，日付ごとに整備した。[9] このような精微なマルクス研究によって，彼はコルニュ以上にヘーゲル左派研究への途を開拓した。ここでオーピッツは，『ドイツ・イデオロギー』形成上の重要な批判対象として位置づけられている。[10]

周知のように，『ドイツ・イデオロギー』はマルクス，エンゲルス，ヘスだけではなく，ヴァイデマイヤーによっても執筆されていた。メンケは，彼の『ヴェストファーレンの蒸気船』におけるオーピッツ批判記事の一部「ブルーノ・バウアーとその擁護者」に言及する。[11] そこでは，オーピッツの「自己意識が歴史を形成する」という命題が批判対象になる。それは，1979年に初めて全文が公刊された「ヴァイデマイヤーのマルクス宛手紙（1846年6月19日）」と関連している。この手紙によれば，「『トリーア新聞』87号の記事に関して私は途惑っている。この記事は，『T. O. aus Oberschlesien』と署名されている。それが，Th・オーピッツであることは明らかだ。彼はバウアーに関して自身の著作を作成した。セリガを草稿から外すべきであろうか。マルクス，君はこの二人の人格を同一とみなすのであろうか」。[12] このヴァイデマイヤーの言説から以下のことが推定可能である。つまり，『ドイツ・イデオロギー』のバウアー関連個所に「オーピッツの『ト

5　Vgl. A. Cornu: Karl Marx und Friedrich Engels. Leben und Werk. 3 Bde. Berlin 1954-1968.

6　田村伊知朗『近代ドイツの国家と民衆――初期エトガー・バウアー研究（1842-1849年）』新評論，1994年，11頁。

7　Vgl. A. Cornu: Karl Marx und Friedrich Engels, a. a. O., Bd. 3, S. 403f.

8　Vgl. W. Mönke: Die heilige Familie. Zur ersten Gemeinschaftsarbeit von Karl Marx und Friedrich Engels. Berlin 1972.

9　Vgl. W. Mönke: Karl Marx Chronik (Unveröffentlite). 1972 u. 1985.

10　Vgl. W. Mönke: Die heilige Familie, a. a. O., S. 138.

11　Vgl. ebenda, S. 271f.

12　Brief v. J. Weidermeyer an K. Marx am 19. 6. 1846. In: MEGA②. Abt. Ⅲ, Bd. 2, S. 231.

リーア新聞』87号に掲載された記事に関する章があった。この草稿は，出版草稿の段階において明らかに存在していた。その後引きちぎられ，現在ではテキストが存在していない」。[13] つまり，このヴァイデマイヤーの手紙に依拠するかぎり，マルクスはブルーノ・バウアーの同伴者としてオーピッツを批判していた。しかし，その原稿は残存していていない。この失われたヴァイデマイヤーとマルクスのブルーノ・バウアー草稿を考察する際にも，オーピッツの思想の概略を再構成することが前提になる。

メンケはこのヴァイデマイヤーへの関与とオーピッツ批判との関連性について暗示していた。このようなコルニュやメンケ等の業績は，当時の東ベルリンにあったブランデンブルク・科学アカデミーによる共同研究による成果でもあった。それが，1970年以降のMEGA②編集に対する研究基盤を形成していた。それは，『ドイツ・イデオロギー』の形成史だけではなく，ドイツ三月前期の精神史に関する研究において特筆されるべきである。

また，同時期に「Fr. Sch.」による「新しい批判的福音書家」が掲載された『社会反映』，ならびにオーピッツ批判記事が掲載された『ヴェストファーレンの蒸気船』が復刻されている。[14] このような復刻版は，1970年代以降におけるドイツ三月前期のヘーゲル左派研究に対して基礎的な情報を提供した。

3．三月革命以後のオーピッツに関する研究史

このように初期オーピッツに関する研究は，三月前期及び初期マルクスに関する研究史においてほとんど看過されてきたと言っても過言ではないであろう。しかし，三月革命敗北以後，後期オーピッツは詩作活動をすると同時に，ロシアの国民詩人プーシキン，ハンガリーの革命派詩人ペティ等の作品をドイツ語に翻訳する。彼の名前は，詩人としてだけではなく，外国詩のドイツ語翻訳者としてドイツ精神史において刻印される。

19世紀ドイツ精神史に関する研究が前世紀初頭において進展した。まず，J・シュテックリンはオーピッツと生前から親交があり，その死後，遺稿類をリーシュタールにおいて管理していた。彼がオーピッツに関する最初の伝記を公表する。[15] 彼は本書においてG・ヘルヴェーク等のドイツ精神史における偉大な諸詩人の列伝を編纂し，その一人としてオーピッツの伝記を編纂した。この学問的批判に耐えうる最初の評伝は，後期オーピッツの文学活動に対する正当な記述であると同時に，初期オーピッツ研究に関する生年月日等の基礎的情報を提供した。また，シュテックリンが死亡した後に，O・クライバーがオーピッツの遺稿と手紙をリーシュタール詩人=都市博物館へと移管した。[16]

また，1990年代において，F・ハイデュークがオーピッツとアイヒェンドルフの関係を，M・エンゲルハルトがオーピッツとプーシキンの関係を精微化した。[17] アイヒェンドルフとプーシキンという二人の詩人に関して，文学史上においてその位置づけがほぼ確定されている。1990年代に公表された両者に関する論稿は，

13　Karl Marx, Friedrich Engels, Joseph Weydemeyer: Die deutsche Ideologie. Hrsg. v. der internatonalen Marx-Engels-Stiftung. Berlin 2004, S. 386.

14　Vgl. Hrsg. v. M. Hess: Gesellschaftsspiegel. Elberfeld 1845-1846. [Neudruck: Amsterdam 1971]; Hrsg. v. O. Lünin: Das Westphälische Dampfboot. Eine Monatschrift. Bielefeld 1845-1848. [Neudruck: Glashütten im Taunus 1972]

15　Vgl. J. Stöcklin: Ein Poetennest. Liestal 1922, S. 186-237.

16　Vgl. M. Tüller: Vom Opitz-Nachlass zum《Poetennest》. In: Baselbieter Heimatbuch. Bd. 12. Liestal 1973, S. 164.

17　Vgl. F. Heiduk: Eichendorff und Theodor Opitz. In: Aurora. Jahrbuch der Eichendorff-Gesellschaft. Bd. 50. Singmaringen 1990, S. 165-176; M. Engelhard: Theodor Opitz. Ein früher Puschkin-Übersetzer. In: Arion. Jahrbuch der Deutschen Puschkin-Gesellschaft. Bd. 2. Bonn 1992. S. 305-314.

オーピッツの思想を媒介にしながらその詩人の思想を精微化することに主眼がある。オーピッツの思想を文学史における媒介者として位置づけることから，それを主要対象にするという潮流が同時期に生じる。それがG・イエリット・ピエチュリックの業績である。

彼女の専門はドイツ文学研究である。彼女はシュレージエン州にあるオポーレ大学において今世紀初頭からオーピッツに関する主題的論文を公表する。前二者とは異なり，彼女はオーピッツの文芸活動を主題化し，彼の思想に伏在する様々な側面，たとえばポーランド亡命者の雑誌『白い鷲』編集長としての足跡，アイヒェンドルフとの関係，スイス亡命者との関係等に関する主題的論稿をほぼ毎年ドイツ語によって公表してきた。[18] その研鑽の結果，彼女は詩人としての後期オーピッツ論にとどまらず，ヘーゲル左派としての前期オーピッツ論を含めたオーピッツ伝を出版する。[19] 本書は彼の伝記だけにとどまらず，『マリア・スチュアート』等の単行本を除き，その新聞記事，パンフレット類を採録している。それらへの接近は，今日ではほとんど限定されているからだ。後期オーピッツ研究史だけではなく，初期オーピッツ研究史から考察しても，本書はその研究史において特筆される価値を有している。とりわけ，今後どのようにオーピッツの詩作活動を分析するのであれ，彼女の解釈は基本的通説となろう。後期オーピッツに関する研究はほぼ完成された，と言っても過言ではない。しかし，前期オーピッツ研究に関して，とりわけその大衆論の位置づけは必ずしも十分ではない。ブルーノ・バウアーの自己意識の哲学から純粋批判への哲学への思想的発展において，オーピッツの思想を位置づけるという観点からは不充分であろう。

4．著作目録から考察されたヘーゲル左派研究史

このような初期オーピッツに関する研究における研究史的欠落を埋めるためには，初期オーピッツをブルーノ・バウアー及びヘーゲル左派の思想圏に位置づけなければならない。しかし，それに関する主題的な研究論文を，すでに別稿で準備している。[20] ここではそれに代えて，彼に関する現在の研究水準をオーピッツ初期著作目録として提示している。その意義をここで論じてみたい。

一般的に言えば，著作目録作成の意義は，研究論文が依拠している史料の限界を端的に示すことにある。そもそも研究論文は，世界において無数に存在している主題の中から，特定の課題を見出す。それは自己を制限することによって成立する。主題的論文に対応する著作目録は，その制限性を端的に表現する。研究論文は，著作目録において提示された資料以外に依拠するものはない。ある思想家の思想を論じる際に，当該著作家以外の著作をもって当該思想家の哲学を論じることはできない。

とりわけ，著作ではなく新聞と雑誌において著者同一性を確定する作業は，必ずしも単純ではない。その主要な原因は，ドイツ三月前期において発刊されていた新聞，雑誌の数の多さにある。欧州全体における人口が，19世紀初頭に爆発的に増大した。国家における教養層が拡大され，文盲が著しく減少した。小学校教員を初めとして新聞，雑誌を読解する職業人階層が形成された。「自由なジャーナリストというタイプ

18　Vgl. z. B. G. Jelitto-Piechulik: Heil, Schweizer, Euch und Dank! Der Schlesier Theodor Opitz als Chefredakteur der polnischen Exilzeitschrift „Der weiße Adler“. In: Hrsg. v. A. Rudolph: Ein weiter Mantel. Polenbilder in Gesellschaft, Politik und Dichtung. Dettelbach 2002, S. 195-223; ders.: Noch ist Polen nicht verloren. Theodor Opitz (1820-1896). Zur Polenlylik eines vergessenen Dichters des politischen Freiheitskampfs. In: Via Schlesia. Jahrbuch 2001. Münster 2002, S. 191-207; ders.: Zum letzten Brief Eichendorfs an einen noch wenig bekannten Schlesischen Literaten- Theodor Opitz (1820-1896). In: Lubowitzer Jahrbuch 2003. Lubowitz, S. 11-18.

19　Vgl. G. Jelitto-Piechulik: Theodor Opitz (1820-1896). Polenfreund, Historiker, Literat und Übersetzer. Berlin 2010.

20　田村伊知朗「初期 Th・オーピッツの思想的発展――ブルーノ・バウアー純粋批判をめぐるドイツ三月前期の政治思想」（未発表）

が・・・1830-40年代に広まった現象である」。[21] 広範な読書階層を背景にして，多くの新聞等の定期刊行物が出版される。民主主義的あるいは急進主義的マス・メディアに限定しても，本著作目録に収録されていない論稿が今後発掘される可能性は高い。

青年ヘーゲル派がマス・メディアに投稿する遠因は，大学教授として講壇哲学を講義する可能性から追放されていたことにもある。彼らは師ヘーゲルの哲学体系に代わる新たな体系を提示することはない。また，彼らは大学講座制のもとで，ある哲学たとえばカント哲学を訓詁学的に討究することからも排除されていた。「青年ヘーゲル派は，ジャーナリズム哲学者として特徴づけられる。その特有なコミュニケーション手段は，定期刊行物である」。[22] 彼らの生計手段には，ジャーナリストという可能性しか残されていなかった。

このような自由なジャーナリストは限定された媒体ではなく，主題の性格に応じて広範囲な媒体に寄稿する。さらに，この問題群には，ドイツ三月前期特有の問題が横たわっている。それは検閲の問題である。この強化によって，多くの著作家は匿名あるいは変名で記事を執筆している場合が多い。アルヒーフ史料や私信等の渉猟によって，今後新たな論稿が発掘される可能性は否定できない。

また，伝記的事実を踏まえた当該思想家における思想的発展を討究する研究は，ある思想的発展段階を恣意的に抽出して，それらを組み合わせて作成されるのではない。もちろん，ある理論的主題を設定してそれを基礎づけようとする場合，ある思想家の発展段階を看過することは必然であろう。このような学問的方法論は，本邦だけではなくドイツにおいても主流となっている。しかし，思想は生成のうちにしか存在しない。[23] ある思想は自己の発展段階と同時期における他の思想との連関のうちにあり，その相互関係においてしか構成されえない。たとえば，読書界においてもっとも著名な思想家の一人，マルクスを例にとろう。その特定の著作の特定の箇所，たとえば『資本論』第１巻第１章のある一節をもって，マルクスの思想として提示することは可能である。引用箇所を明記しているかぎり，それはマルクスの思想の一部として流通する。しかし，その箇所だけをもってマルクスの思想として代表させることはできない。

このような著作目録の作成の意義を研究史一般ではなく，ヘーゲル左派研究史において考察してみよう。まず，マルクス，エンゲルスの著作目録がこの観点から研究史において特筆されるべきであろう。両者の全集編纂作業は，まず前世紀初頭においてマルクス，エンゲルス全集（MEGA①）としてモスクワにあったマルクス・エンゲルス研究所によって着手された。[24] この作業は，1927年から1935年まで実施された。その主導者は，当初リヤザノフであったが，途中からアドラツキーに変更された。また，この作業と同時並行的に学術的版として『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』が1926年，1927年に公刊された。[25]

しかし，この作業はスターリン粛清，独ソ戦争によるソビエト連邦共和国内部の政治的，社会的混乱によって頓挫した。とりわけ，スターリン粛清によってマルクス・エンゲルス研究所長が変更になったことは，『ドイツ・イデオロギー』編纂作業をスターリン主義的観点から改竄することにつながった。[26] 著作目録の作成という観点から重要なことは，『ドイツ・イデオロギー』の著者確定作業におけるマルクス，エンゲルス，ヘスそしてヴァイデマイヤーの持分問題である。誰がどの部分を執筆あるいは改稿したのかは，この観点か

21　H. Rosenberg: Literaturverhältnisse im deutschen Vormärz. Berlin 1975, S. 32.

22　W. Bunzel: Form- und Funktionswandel der Philosophie im Vormärz. Sozial-, medien- und kommunikationsgeschichtliche Aspekte des Junghegelianismus. In: Hrsg. v. L. Lambrecht: Entstehen des Öffentlichen. Eine andere Politik. Frankfurt a. M. u. Berlin 2007, S. 17.

23　Vgl. K. Schmidt: Eine Weltanschauung. Wahrheiten und Irrtümer. Dessau 1850, S. 201.

24　Vgl. Hrsg. v. D. B. Rjazanov u. V. Adoratskij: Historisch-kritische Gesamtausgabe. Werke/ Schriften/ Briefe. Im Auftrage des Marx-Engels-Instituts. Frankfurt a. M. 1927 u. Berlin 1929-1932 u. Moskow 1935.

25　Vgl. Hrsg. v. D. B. Rjazanov: Marx-Engels-Archiv. Zeitschrift des Marx-Engels-Instituts. Frankfurt a. M. 1926-1927.

26　廣末渉『マルクス主義の成立過程』至誠堂，1968年，126頁以下参照。

ら看過することはできない。マルクス，エンゲルス以外の人間によって執筆されたものを彼らの著作物とみなすことはできない。

さらに，このMEGA①は，『ドイツ・イデオロギー』における持分問題を超えて，ある論稿それ自体の著者確定作業において錯誤を引き起こす。それが「シュトラウスとフォイエルバッハの審判者としてのルター」の著者同定に関する問題である。[27] この「非ベルリン人」という変名の論稿はMEGA①によってマルクスの著作とみなされ，その後のMEWを経て前世紀中葉までその認定が効力を持っていた。

にもかかわらず，1967年にH-M・ザス教授によって，この論稿の著者はマルクスではなく，フォイエルバッハであることが証明された。[28] 世界的に著名なヘーゲル左派研究者による研究論文によって，これ以前の研究書の多くが書き換えを余儀なくされた。この論稿の著者をマルクスとみなし，その思想的発展とりわけマルクスとフォイエルバッハ関係を討究した研究書は，改訂を余儀なくされた。その著名な事例として，W・シュッフェンハウアーのフォイエルバッハ論を挙げるだけで充分であろう。[29]

マルクス，エンゲルスに関する著作目録作成を含めた研究一般は国家的事業として，そして国際的支援のもとで遂行された。両者の全集の編纂作業は，個人あるいは数人の研究者による自発的労働の成果ではない。MEGA①は，国家機関と同等の役割を果たしていた当時のソビエト共産党付属機関によって編纂された。そこでの研究労働者は，研究費をほぼ無尽蔵に使用して，労働対価としてこの編纂作業を実施した。その精度は高いと思われていた。にもかかわらず，その著作目録の作成作業において錯誤が生じている。それだけ，この作業には慎重性と配慮が必要とされる。

次に，両人以外の中心ヘーゲル左派の著作目録とそれに関連するかぎりでの伝記等に言及してみよう。まず，フォイエルバッハについて述べてみよう。彼に関する全集は現在，シュッフェンハウアーによって編集されている。[30] この全集には公刊された著作だけではなく，新聞と雑誌における寄稿論稿そして手紙も含まれている。それは個人的編纂作業としては，他の追随を許さないものである。

また，ヘーゲル左派という思想集団を初めて明確にしたシュトラウスに関しては，E・ツェラーによって伝記が編纂されている。[31] さらに，ツェラーは，この伝記に基づき，彼に関する著作集も編集した。[32] 彼に関する著作目録，とりわけ初期著作目録の整備という観点からすれば，ツィーガーの伝記を合わせて考察するとほぼ問題がないであろう。[33] M・ヘスに関して言えば，メンケがその著作集を出版している。[34] 『マルクス・クロニック』等の業績によって明白であるように，メンケはコルニュ以上にドイツ三月前期に関する見識を有している。本書において，彼に関する著作目録もほぼ完備されている。そこにおいて遺漏を見出すことは，困難であろう。さらに，シュティルナーに関して言えば，J・H・マッケイが彼に関する『小作品集』を出版した。[35] 本書によって，彼の新聞と雑誌における論稿が整備された。ルーゲは自身で初期著作集

27 Vgl. Kein Berliner: Luther als Schiedrichter zwischen Strauß und Feuerbach. In: Hrsg. v. A. Ruge: Anekdota. Bd. 2. Zürich u. Winterthur 1843, S. 206-208.

28 Vgl. H. M. Saß: Feuerbach statt Marx. Zur Verfasserschaft des Aufsatzes „Luther als Schiedrichter zwischen Strauß und Feuerbach“. In: International Review of Social History. Vol. XIII. 1967, S. 108-119.

29 Vgl. W. Schuffenhauer: Feuerbach und der junge Marx. Zur Entstehungsgeschichte der Marxistischen Weltanschuung. Berlin 1965, S. 21-34 u. 1972, S. 27-39.

30 Vgl. Hrsg. v. W. Schuffenhauer: L. Feuerbach: Gesammelte Werke. Berlin 1981-.

31 Vgl. E. Zeller: David Friedrich Strauß in seinem Leben und seinen Schriften. Bonn 1874.

32 Vgl. Hrsg. v. E. Zeller: Gesammelte Schriften von David Friedrich Strauß. 12 Bde. Bonn 1876-1895.

33 Vgl. Th. Zieger: David Friedrich Strauß. 2 Bde. Straßburg 1908.

34 Vgl. Hrsg. v. W. Mönke: Moses Hess. Philosophische und sozialistische Schriften 1837-1850. Berlin 1980.

35 Vgl. Hrsg. v. J. H. Mackay: M. Stirner: Kleinere Schriften und seine Entgegnungen auf die Kritik seines Werkes ›Der Einzige und sein Eigentum‹. Treptow b. Berlin 1914 [Neudruck: Stuttgart/Bad Cannstatt 1976].

を編纂している。[36] また，初期ルーゲに限定すれば，A・ツァナルドがその著作目録を完成させた。[37]

最後の中心ヘーゲル左派として，本稿の対象であるオーピッツと密接に関連しているブルーノ・バウアーに言及してみよう。バウアー研究は戦前から戦後にかけて，E・バルニコルによってほぼ独占されてきた。彼によって意図された著作目録は，バウアー自身の著作だけではなく，バウアーに言及した同時代人の論稿をも射程に入れていた。しかし，この企図はバルニコルの死によって中断される。この作業の一部は，P・ライマー，H-M・ザスそしてR・オットーによって読書界に流布される。[38] もちろん，伝記だけではなく，著作目録の完備という観点から，この企図は中断されたままであり，未完である。このように設定された研究課題は個人的営為の限界を超えている。また，ザスは初期バウアーのアンソロジーを編集した。[39] この本によって，初期バウアーによって編集された『一般文芸新聞』と『北ドイツ新聞』における論稿が広範な読書界に流布された。

さらに，初期バウアーに限定すれば，ツァナルドがその著作目録を完成させた。[40] しかし，著作目録作成作業は，どれほど細心の注意を払おうとも，その遺漏を免れることはできない。アルヒーフ史料が新たに発掘され，同時代資料が検証されることは不可避である。それによって，著作目録は加筆あるいは修正されねばならない。とりわけ，この作業が，MEGA①及びMEGA②のように国家的，国際的支援を受けた共同的営為の成果ではなく，個人的営為に依存しているかぎり完全性を求めることは無意味であろう。したがって，初期ブルーノ・バウアー著作目録は，筆者によって最近より精微化された。[41]

これまで中核的な青年ヘーゲル派の著作目録を概観してきた。近年ではそれだけにとどまることなく，周辺ヘーゲル左派の研究もまた進展してきた。そのなかで，彼らに関する著作目録も徐々に明らかになってきた。無数の周辺ヘーゲル左派のなかから，まずブルーノ・バウアーと密接な関係にあるエトガー・バウアーに関して述べてみよう。彼は従来兄ブルーノのエピゴーネンと言われていたが，その独自の意義が解明されてきた。まず，E・ガンビーが，エトガー・バウアーに関する全生涯にわたる伝記を完成させた。[42] 本書は，バウアーが革命敗北以後，コペンハーゲン警察署長に送付した革命運動に関する「秘密報告書」の序文として執筆された。それゆえ，初期エトガー・バウアーに関する思想内容に関する記述及びその著作目録における遺漏は，当然であった。初期エドガー・バウアーに限定されていたが，筆者によって数度にわたる著作目録に関する改訂作業が実施された。[43]

36　Vgl. Hrsg. v. A. Ruge: Arnord Ruges sämmtliche Werke. 10 Bde. Leipzig 1847.

37　Vgl. A. Zanardo: Arnord Ruge, giovane hegeliano 1824-1849. Contributo bibliografico. In: Annali dell'istituto Giangiacomo Feltrinelli. Bd. 12. Milano 1970, S. 189-269.

38　Hrsg. v. P. Reimer u. H-M. Sass: E. Barnikol: Bruno Bauer. Studien und Materialien. Assen 1972; Neu herg. v. R. Ott: Hrsg. v. E. Barnikol: B. Bauer: Das entdeckte Christentum im Vormärz: Bruno Bauers Kampf gegen Religion und Christentum und Erstausgabe seiner Kampfschrift. Aalen 1989.

39　Vgl. Hrsg. v. H. M. Saß: Bruno Bauer. Feldzüge der reinen Kritik. Frankfurt a. M. 1968.

40　Vgl. A. Zanardo: Bruno Bauer hegeliano e giovane hegeliano. In: Rivista Critica di Storia della Filosofia. Firenz 1966, S. 189-210 u. S. 293-327.

41　田村伊知朗「初期ブルーノ・バウアー研究の基礎構築――ブルーノ・バウアー初期著作目録(1829-1849年)とその研究史的意義」『北海道教育大学紀要』第60巻第1号，2009年，97-111頁参照。

42　Vgl. E. Gamby: Edgar Bauer. Junghegelianer, Publizist und Polizeiagent. Trier 1985.

43　田村伊知朗「エトガー・バウアー初期著作目録(1842-1849年)」『法政大学大学院紀要』第25号，1990年，149-163頁；田村伊知朗『近代ドイツの国家と民衆――初期エトガー・バウアー研究（1842-1849年)』新評論，1994年，137-154頁：Tamura, Ichiro: Die Aufhebung des modernen Staat. Die politische Philosophie des jungen Edgar Bauer im deutschen Vormärz. Berlin 2005, S. 78-90，参照。

また，ブルーノ・バウアーの自己意識の哲学から純粋批判への転換において，その批判対象になった思想家の一人がカール・ナウヴェルクであった。まず，周辺ヘーゲル左派の研究を精力的に推進してきたＬ・ラーンブレヒトが，初期ナウヴェルクの著作目録を完成させた。[44] 彼はその後，ナウヴェルクを中心とした周辺ヘーゲル左派総体に関する教授資格論文を提出した。この論文において彼の著作目録もより整備されているはずである。しかし，この論稿は未だ公表されていない。[45] その暫定的措置として筆者が数次にわたる初期カール・ナウヴェルクの著作目録に関する改訂を実行した。[46] アルヒーフ史料等の新資料が発掘されないかぎり，この著作目録はほぼ完全であろう。

さらに，カール・シュミットはシュティルナーと共に，ヘーゲル左派の運動体に固有のパラダイムを転換した。Ｐ・ヴェッツエルが，彼に関する学術的研究を第二次世界大戦後すぐに公表した。この博士論文においてカール・シュミットの全体の思想が考察されているだけでなく，その文献目録も初めて整備された。[47] シュミットは1848年敗北以後，教育哲学の分野でドイツ精神史に名を刻んだ。それゆえ，ドイツ教育史研究者によって戦後幾つの研究論文が公表されている。そのなかで，彼の著作目録も整備された。[48] しかし，前世紀末以後，彼に関する研究は現れていないので，筆者がその著作目録を数次にわたって整備した。[49]

さらに，マルクスの最も親密な友人の一人であったカール・フリートリヒ・ケッペンに関して言えば，今世紀初頭において体系的な著作集が，Ｈ・ペッパーレによって出版された。[50] 本書は，ケッペンの選択された著作とペッパーレによる序文から構成されているが，後者において著作目録に関する箇所もある。とりわけ，本書はＨ・Ｌ・ケッペンとＫ・Ｆ・ケッペンとの著者確定作業等を内包している。

また，ヘルマン・イェリネクは本稿で問題にするオーピッツと同様に，ブルーノ・バウアーの純粋批判の哲学を受容した思想家である。ヘーゲル左派としての彼の思想を筆者が最近考察した。その理論的論稿においてその著作目録に関する部分が内包されている。[51] このような研究史的状況において，本稿の対象であるTh・オーピッツの著作目録も位置づけられる。

なお，ここで便宜的に使用されてきた中心ヘーゲル左派と周辺ヘーゲル左派の二分法は，現在の出版状況

44　Vgl. L. Lambrecht: Die „fürchterlich revolutionäre Kraft“ der Kritik oder „Ideen der großen Revolution sind lange noch nicht ausgelebt“. Zur Rezeption der Französischen Revolution bei den Junghegelianern E. Bauer und K. Nauwerck. In: Hrsg. v. H. G. Winter: ›Sie, und nicht Wir‹. Die Französische Revolution und ihre Wirkung auf Norddeutschland. Hamburg 1989. Bd. 2, S. 507–509.

45　Vgl. L. Lambrecht: Junghegelaianismus. Zur Auseinandersetzung der Junghegelianer mit der Philosophiegeschichte und zu ihrer Rezeption der Philosophie Fichtes und der Faranzösische Revolution. Habil. Bremen 1992 (Unveröffentlicht).

46　田村伊知朗「初期カール・ナウヴェルク研究序説――自由主義的政治思想とヘーゲル左派」『法政大学教養部紀要』第102号，1997年，71–78頁；田村伊知朗『近代の揚棄と社会国家――初期カール・シュミットと初期カール・ナウヴェルクの政治思想』萌文社，2005年，138–154頁参照。

47　Vgl. P. Wätzel: Karl Schmidt als Theologe. Diss. Jena 1946, S. 249–252.

48　Vgl: H. Egerland: Der Pädagoge Karl Schmidt (1819–1864). Ein Lebensbild. In: Hrsg. v. Landeshauptarchiv Sachsen-Anhalt: Mitteilungen des Vereins für Anhaltische Landeskunde 1. Jg. Köthen 1992, S. 126–130.

49　田村伊知朗「歴史的世界の把握をめぐる思想史的考察――初期カール・シュミット（Karl Schmidt 1819–1864年）のヘーゲル左派批判を中心にして」『法政大学教養部紀要』第121号，2002年，51–56頁；田村伊知朗『近代の揚棄と社会国家――初期カール・シュミットと初期カール・ナウヴェルクの政治思想』前掲書，71–76頁参照。

50　Hrsg. v. H. Pepperle: Karl Friedrich Köppen. Ausgewählte Schriften in zwei Bände. Mit einer biographischen und werkanalytischen Einleitung. Berlin 2003.

51　田村伊知朗「ドイツ三月前期におけるヘルマン・イェリネクの宗教批判と政治批判――ブルーノ・バウアーの純粋批判との関連性における思想史的考察」『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』第62巻第２号，2012年，15–26頁参照。

を考察すれば，今後も改善されないであろう。なぜなら，今世紀になってドイツ各地の図書館が有している書籍の多くが写真製版されて，販売されているからである。また，バイエルン州立図書館等は主要著作を写真製版して，無料でインターネット上に公開している。所在図書館に出向き，著作を複写することから，研究者は解放されつつある。

他面で，主要著作が容易にかつ安価あるいは無料で入手されるかぎり，それらを含む全集編纂作業はその出版がほとんど不可能になる。現在その全集作成作業が進行中であるマルクス，エンゲルス全集，フォイエルバッハ全集等を除けば，全集を出版する商業的意味づけが減少する。主要著作を除いた小品のみを読むという需要はほとんどないからである。中心ヘーゲル左派に属するブルーノ・バウアーですらその全集編集作業は困難であろう。初期バウアーに限定しても，出版事情を考慮すればほぼ不可能であろう。況やエトガー・バウアーあるいはオーピッツに関する全集作成は問題外である。

5．オーピッツ初期著作目録に固有の問題

ここで，初期オーピッツの著作目録に特有な問題に言及してみよう。後期オーピッツは，詩作活動に専念しており，直接的にはヘーゲル左派あるいはブルーノ・バウアーの純粋批判との関連性を有していない。ここでは，初期オーピッツの思想的営為に関する目録に限定する。始期としての1842年は自明である。それ以前の著作活動が確認されていないからである。後期オーピッツと親交があったシュテックリンによれば，「オーピッツはすでに1842年に，当時著名な自由主義者，ロベルト・ブルームによって編集されていた『タッシェンブーフ』に関する哲学的論稿がある・・・これは，二つの理由から重要だ。22歳のオーピッツがすでに学問的闘争の舞台に立っていること，及びオーピッツが若い時から政治的アジテーターであったという二つの理由からだ」。[52] シュテックリンの示唆にもかかわらず，この論稿は未だ発見されていない。

問題は終期としての1850年である。初期オーピッツは，純粋批判との関連性において，フランス革命に関する論稿を残している。「身分制的制限から解放された『個別的原子』を新たな統一体において統括する排他的同一性が，新たに基礎づけられる」。[53] フランス革命は平等社会ではなく，むしろその反対の原理をもたらす。純粋批判と大衆批判との連関のうちに，フランス革命論が配置されている。したがって，これに関する論稿は，三月前期との統一的思考様式にある。それゆえ，本著作目録において，そのフランス革命論を包含するために，1850年を終期としている。また，すべて単行本，記事掲載雑誌には，その所在図書館名あるいは復刻年とその出版地名が記されている。読者がその入手を容易にすると同時，筆者が複写依頼をした図書館に対して学問的敬意を表するためである。

しかし，今後の初期オーピッツの著作目録に対して，以下の課題が容易に指摘される。まず，この著作目録にはオーピッツ自身の手紙と彼宛の手紙に関する目録が欠如している。彼宛の手紙と彼自身の手紙の多くは，リーシュタール詩人＝都市博物館（スイス連邦共和国：バーゼル州）に保管されている。但し，その目録は未だ完成していない。また，彼のブルーノ・バウアー宛の手紙は，モスクワにある旧マルクス主義・レーニン主義研究所に保管されている。これらの手紙類はこの著作目録には含まれていない。それは，今後の課題として残されている。

52　J. Stöcklin: Ein Poetennest, a. a. O., S. 212.

53　M. Tomba: Krise und Kritik bei Bruno Bauer. Kategorien des Politischen im nachhegelschen Denken. Frankfurt a. M. u. Berlin 2005, S. 176.

Bibliographie des jungen Theodor Opitz (1842-1850)
(テオドール・オーピッツ初期著作目録(1842-1850年))

1842

1. Freikugeln. Blätter für erste und heitere Unterhaltung. Hrsg. v. M. Bauschke. Leibzig: Literarisches Museum.

1. 1 [Anonym] „Breslauer Belletristen".

Nr. 17, 31. 10, S. 68.

[Standort: Stiftung Archiv der Parteien und Massenorganisationen der DDR im Bundesarchiv, Berlin]

[Quelle: W. Mönke: Die heilige Familie. Zur ersten Gemeinschaftsarbeit von Karl Marx und Friedrich Engels. Berlin 1972, S. 273.]

1844

1. Wigand's Vierteljahrsschrift. Leipzig: Otto Wigand.

[Neudruck: Vaduz 1981]

1. 1 „Zur Kunst. Friedrich Hölderlin".

Bd. 2, S. 303-320.

1845

1. Rheinische Jahrbücher zur gesellschaftlichen Reform. Hrsg. v. H. Püttmann. Darmstadt: C. W. Leske.

[Neudruck: Leipzig 1970]

1. 1 „Gedicht. 1. Bekenntniss, 2. Unbezahbar, 3. Wintertag".

Bd. 1, S. 358-359.

2. Trier'sche Zeitung. Trier.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

2. 1 [T. O. Aus Oberschlesien]: „[5. August]".

Nr. 230, 18. 8, S. 2.

2. 2 [T. O. Aus Oberschlesien]: „[31. August]".

Nr. 253, 10. 9, S. 1-2.

2. 3 [TO Aus Oberschlesien]: „Bruno Bauers ‚Deutschland und die Revolution. Ⅲ. Abtheilung' ".

Nr. 353, 19. 12, S. 2-3.

1846

1. Bruno Bauer und seine Gegner. Vier kritische Artikel. Breslau: Eduard Trewendt, 30 S.

[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

1847

1．Die Helden der Masse. Charakteristiken. Grünberg: Weiss, 51 S.
[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

2．Beiträge zur Geschichte der französischen Revolution. Leipzig: G. Mayer, 76 S.
[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

1848

1．(Hrsg): Eine alte Rede über die Preßfreiheit, besser als viele neue! Den Deputirten aller National-Versammlungen. Creutzburg: L. Müller, 20 S.
[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

2．Allgemeine Oder=Zeitung. Breslau.
[Standort: Stiftung Archiv der Parteien und Massenorganisationen der DDR im Bundesarchiv, Berlin]
2．1 Theodor Opitz: „Bedenkt, was Ihr tut".
Nr. 149, 29. 6.

2．2 Theodor Opitz: „Das tamaerlansche Prinzip und die Freiheit".
Erste Beilage zu Nr. 149, 29. 6, S. 4.

2．3 Theodor Opitz: „Platen".
Nr. 157, 8. 7, S. 2.

2．4 Theodor Opitz: „Herr Kühlewetter".
Erste Beilage zu Nr. 199, 26. 8, S. 4.

3．Rothes Philistergift: Ein Gedicht. Breslau: Kohn, 1 S.
[Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin]

4．Der Fall von Wien. Ein Gedicht: Breslau: Kohn, 1 S.
[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

1849

1．(Hrsg. u. Übers.): Proudhons's neueste Schrift. Theoretischer und praktischer Beweis des Sozialismus, oder Revolution durch den Kredit. Leipzig: Fernau, 84 S.
[Standort: Bayerische Staatsbibliothek, München]

2．Allgemeine Oder Zeitung, a. a. O.
[S. 1848. 1]
2．1 [Theodor Opitz]: „Bruno Bauer's Verteidigunsrede".

Beilage zu Nr. 63, 16. 3. 1849.

2．2［Theodor Opitz］: „Bruno Bauer's Verteidigunsrede".
Beilage zu Nr. 64, 17. 3. 1849.

1850

1．Robespierres Triumph und Sturz. Ein Beitrag zur Geschichte der französischen Revolution. Leipzig: Costenoble & Remmelmann, 291 S.
［Standort: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, Berlin］

［付記］本研究は，2012年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究Ｃ，課題番号22530192「Ｂ・バウアーの大衆批判――その歴史的位相と後期近代的位相」）による研究成果の一部である。

Verfasser　Ichiro Tamura

Prof. Dr. phil., geb. 1958 in Japan (Bezirk: Kagawa). Professor an der Pädagogischen Hochschule zu Hokkaido. Thematische Schwerpunkte und Veröffentlichungen: zur politischen Philosophie (Junghegelianismus, insbesondere Bruno Bauer, Edgar Bauer, Hermann Jellinek, Karl Nauwerck, Theodor Opitz, Karl Schmidt) und zur politischen Theorie (Wohlfahrtsstaat)

（函館校教授）